ソポチャニ修道院の装飾プログラム
―ネマニチ朝の意向―

嶋　田　紗　千

はじめに

セルビア南部の都市ノヴィ・パザルから西に11キロ離れたところに、中世セルビア王国ネマニチ朝時代の初期首都ラスが12世紀末から13世紀末まであった。６世紀のビザンティン帝国の歴史家プロコピオスによると、ラスはローマ時代の軍事要塞都市「アルサ」という地名[1]であったが、その後300年近く歴史上には浮上しない。スラヴ民族の移動が落ち着いた９世紀から12世紀初頭はブルガリアによって占領され、その後、ビザンティン帝国とセルビアによって交互に支配され、最終的にセルビアの支配領となり、首都が置かれた。ラスには、現在もかつての片鱗がみられ、古都を守った要塞の一部や、８世紀に建立された聖使徒ペテロとパウロ聖堂（通称、ペトロヴァ聖堂）、12世紀末の聖ゲオルグの柱修道院（通称、ジョルジェヴィ・ストゥポヴィ修道院）、そして13世紀後半のソポチャニ修道院（図１）などである。1455年以降、オスマン帝国に征服されてイスラム教徒の町ノヴィ・パザルができると、様相は一変した。イスラム教の国に支配されてもセルビア正教を信仰することは可能であったため、修道士（女）たちは修道院や聖堂を守ることができた。そのような地にあるソポチャニ修道院の聖三位一体聖堂について本稿では寄進者とその一族の意向を装飾プログラムより取り上げる。

ソポチャニ修道院は、中世セルビア王国ネマニチ朝第五代国王ステファン・ウロシュ一世（在位1243-1276年）によって建立されたセルビアを代表する修道院である。フレスコ画の画家については未だ明らかになっておらず、おそらくコンスタンティノープルから来た画家、もしくはそこで修業した画家による作と考えられる[2]。ビザンティン美術におけるコムネノス朝様式からパレオロゴス朝様式の過渡期を示す聖堂装飾と言われ、ナオスとナルテックスには顕著な様式の違いが見られる。

ソポチャニ修道院の特殊な点は、200年以上も野晒しにされていたことであろう。オスマン帝国統治下で火災が起こり、修道士たちは離れていき、1689年に屋根の鉛が剥がされて長い間廃墟となっていた[3]（図２）。屋根を失った聖堂が再び息を吹き返すのは、1926-28年の大規模な修復作業以降である[4]。その後、何度となく修復が繰り返され、損傷していた建築は補強され、フレスコ画からは埃や煤など余分なものが取り除かれ、徐々に輝きを取り戻していった。ソポチャニ修道院の聖堂に残されたフレスコ画の表面積は740.69㎡で、計測によると破壊されたのは962.81㎡である[5]。つまり、56.5% 以上のフレスコ画が損傷を受け、特に屋根周辺の高所のフレ

スコ画はほぼ崩壊してしまった。

1　修道院建立と歴史、建築

ソポチャニ修道院は、ウロシュ一世の治世下に、ウロシュ自身と母アナ・ダンドロ（ヴェネツィアのダンドロ家出身）、ソポチャニ修道院初代院長のヨアニキイェ大主教を埋葬する目的で創建され、聖堂内にはサルコファガス（レリーフと銘文を施した石棺）が置かれた[6]。建立およびフレスコ画の制作年代に関しては、聖堂内に描かれる寄進者像の服装や持ち物、彼の息子（王子）たちの年齢から[7]、またアナ・ダンドロの死亡年代から[8]、大主教サヴァ二世の在位期間から[9]推測することが盛んに行われてきた。のちに描き直しや増築されたため、フレスコ画の制作年代は複数期からなる。

図３の支配者３人の図像の右側の人物が寄進者ウロシュ一世で、左手には建物の模型を持つ。これはこの聖堂の模型であり、聖堂を建てて寄進したことを意味している。この模型は、図１の聖堂の外観とは向きが逆であるが、大きな円蓋と二段に見える切妻屋根があることで同一の建物を表していることが分かる。しかし、図１の左側にある角柱のような高い塔（鐘楼）と３つのアーチが連なった建物（外ナルテックス）が、図３の模型に描かれてはいない。それによってウロシュ一世が建立したのは、聖堂のナオスと内ナルテックスのみで、外ナルテックスと鐘楼はのちに増築したことが分かる。外ナルテックスにはドゥシャン王（のちに皇帝、王位1331-46年、帝位1346-55年）とヨアニキイェ二世（大主教1338-46、総主教1346-54）の肖像画が銘文と共に残される。銘文によると、ドゥシャンは皇帝ではなく、王として描かれていることから、王位にあった1331-46年の間に寄進したと判断でき、同時にヨアニキイェ二世が大主教と書かれているために1338年以降に建立したと考えられる。それゆえ、制作年代は1338年から1345年の間と推定できる[10]。

「ソポチャニ」という名称はラシュカ川の源流の近くにあることから、「源流、泉」を意味する古スラヴ語「ソポト（sopot）」から「ソポトの修道院」と呼ばれ、のちに「ソポチャニ修道院」となった[11]。セルビアの修道院の名称は、地名・河川の名称、または寄進者の名前に由来することが多いため、特定の固有名詞ではない名称は非常に珍しい。

ソポチャニ修道院の聖堂建築は、ストゥデニツァ修道院の聖母聖堂（1190年）やミレシェヴァ修道院（13世紀前半）、ジチャ修道院（1206-21年）と同様セルビアの初期建築様式のラシュカ様式に属す。単廊式で翼廊との交差部に円蓋が正方形のプランの上に載る（図４）[12]。東側に半円形のアプシス、その左右にディアコニコン（輔祭室）とプロテシス（奉納所）がそれぞれ聖母と聖ニコラオスに捧げられた小礼拝堂として設置され、正教会の典礼に応じた構造となっている。円蓋は、切妻屋根で支えられ、その単廊自体は左右を翼廊と小礼拝堂で強化されている。単廊はナオスと内ナルテックスに二つに分けられ、それぞれ天井が高く、広い空間で、左右に長方形の小礼拝堂（聖シメオン・ネマニャ、聖ステファン、聖ニコラオス、聖ゲオルギオス）がある。この建築の特徴は、高さのある至聖所、ナオスと内ナルテックスに、左右にそれぞれ３室ずつ小さい側室をもつことである。そのため、一見、三廊式のバシリカ式のような外観ではあるが、内部はナオスと内ナルテックスの間に壁があり、空間を大きく二つに分けている。

外壁は鍾乳石によるロマネスク様式で、アドリア海沿岸地域（ドゥブロブニックやその他ダルマチア地方）の特徴といえる[13]。内壁は黄土色の漆喰で塗られ、その上にフレスコ画層がある。出入口は西側に１カ所あり、窓は円蓋に８カ所、東側３カ所、西側に１カ所、南北上段に各３カ所ずつ、そして各小礼拝堂に１カ所ずつあり、聖堂内は比較的明るい。窓や扉縁は白い大理石で装飾される。大理石のレリーフは、ストゥデニツァ修道院主聖堂やバニャスカ修道院（1313-17年）、デチャニ修道院（1326-48年）に比べて質素である。

外ナルテックスの西端には、３階建ての鐘楼が位置する。外ナルテックスは屋根と柱のみの開口部の広い空間で、中央の尖頭アーチが主に切妻屋根を支え、周囲を半円アーチが柱と柱を繋いでいる。これは、その後、プリズレンのボゴロディツァ・リェヴィシュカ聖堂（1306-07年）、グラチャニツァ修道院（1321年）、ペーチ総主教座修道院（1346-1463年）でも見られる構造である。

２　装飾プログラム

装飾プログラムを考察する前に、まず図像の配置を概観し、特徴的な図像の組み合わせについてみていきた。聖堂内は入り組んだ空間となっているが、主に４つの空間からなっている。至聖所（アプシス、ディアコニコン、プロテシス）、ナオス（円蓋の下のペンデンティヴを含む至聖所以外の空間）、内ナルテックスと小礼拝堂、そして外ナルテックスである。

(1)　至聖所

東壁のアプシス上部アーチには、「聖霊降臨（ペンテコステ）」が一部損傷しているが確認できる。上部の聖霊の部分は剥落しているが、使徒たちが半円形に座り、その左右に人々が小さく描かれる。この聖堂は三位一体に捧げられた聖堂であるため、「聖霊降臨」がこの重要な場所に表された[14]。その下の半円形コンクは剥落して現存しないが、通常ビザンティン聖堂では、二人の天使を伴った聖母子像が描かれる。その下段は「使徒の聖体拝領」の場面で左右に使徒が６名ずつ配され、パンとワインを配する典礼場面を示す。その下段は、巻物の祈祷文を広げた10名のギリシア教父たちが窓の左右に５名ずつ祈りの身振りで典礼を行っている。窓の下には聖体のパンとして幼子キリストが横たわる「メリスモス」が小さく配される。これは上の「聖体拝領」の場面と対に描かれる作例で、12世紀より「神の小羊（アムノス）」が聖体を裂く際に歌われたことで、13世紀には聖体皿に幼子キリストが横たわる図像として表されるようになったものである[15]。

その左の北壁には、上から「埋葬」「墓を訪れる聖女たち」「使徒たちの前に表れるキリスト」、その下に二人のセルビア神学者たち（大主教アルセニイェとサヴァ二世）が描かれる（図５）。右の南壁には、「聖女の前に表れるキリスト」「トマスの疑い」、その下に二人の神学者たち（セルビアの大主教サヴァ一世とアンティオキアのイグナティオス）が配される。

アプシスの左右に死から復活の場面を対で表し、キリストの復活を強調していることが示されている。ギリシア教父の列の両端にセルビア正教会で重要な役割を果たした聖職者を配する点はギリシア教父に準ずる地位をセルビアが主張していると読み取れる。

アプシスの南側にあるディアコニコン（輔祭室）の東壁には、上段のアーチ部分に聖ニコラオスを伴うデーシス、中段にマンディリオンを中心に洗礼者ヨハネと神学者ヨハネが表される。その隣の西壁には「聖ニコラオスの奉納」、その下には「聖ニコラオスの誕生」が配される。ニコラオス伝が描かれていることで分かる通り、ディアコニコンが聖ニコラオスに捧げられた小礼拝堂として位置付けられてもいる[16]。

アプシスの北側にあるプロテシス（奉納所）の東壁の上段アーチには「受胎告知」、南壁に「聖母の降誕」と「聖母を慈しむ両親」、西壁に「聖母の神殿奉献」がプロテシスの三方向に残される。東壁のコンクには半身像の聖母子像、その下に二人の天使とメリスモスが配される。小さいながらも聖母伝の内４場面が描かれるため、このプロテシスは聖母に捧げられた小礼拝堂とも呼ばれる[17]。

(2)　ペンデンティヴ（三角穹隅）とナオス

円蓋を支える４つのペンデンティヴには、聖堂建築でよく確認できる４人の福音書記者がここでも表される。南東に聖マタイ、南西に聖マルコ、北西に聖ルカ、北東に聖ヨハネが建物を背景に座って表される。彼らの間にメダイオンに入った旧約の義人ノア、預言者（不詳）、父祖セス、預言者（不詳）が半身像で描かれる。

その上の円蓋の縁のタンブールには、建立に関する銘文が記されるが、一部剥落しているために制作年代は確認できない。損傷している部分が多いが、タシチによって以下のように解読された[18]。

「主よ、あなたに信頼を寄せる人々の拠点であるあなたは、あなたの名誉ある血で得た教会を設立した。」

ナオス北翼廊には、アーチに「40人の殉教者」、その下段には使徒トマス、使徒（不詳）、使徒ヨハネ、福音書記者マルコとルカ、メダイオンの中に医療聖人、使徒（不詳）、マンディリオン（聖顔布）、使徒ペテロが配される。その正面の南翼廊には、アーチに「アブラハムの饗宴」と「洗礼」、その下段には、聖パウロ、福音書記者マタイ、６人の使徒（不詳）、メダイオンの中に医療聖人（不詳）、聖パンテレイモン、医療聖人（不詳）が描かれる。北壁上段には「降誕」、その下に「変容」、最下段に柱頭聖人（不詳）と聖ステファン、その正面の南壁上段には「神殿奉献」、その下「学者の間に座る12歳のキリスト」、最下段には洗礼者ヨハネ、柱頭聖人（不詳）が配される。北西壁「エルサレム入城」「冥府降下」４名聖戦士（不詳）、その正面の南西壁「ラザロの復活」「磔刑」聖母と寄進者の群像（聖シメオン・ネマニャ、初代戴冠王ステファン、ウロシュ一世）が描かれる。西壁には、「昇天」と「聖母の眠り」（図６）、最下段にはドラグティン王子、ミルティン王子、聖戦士、ルネットに半身像のキリスト、３人の聖戦士（不詳）が描かれる。ナオスのピラスターには全身像または半身像の預言者や父祖が計51人と、南壁ピラスターにキリスト像が大きく表される。

ナオスのキリスト伝は北壁と南壁を交互に使いながら物語が視覚化された。まず、北壁上段の「降誕」、その正面の南壁上段の「神殿奉献」、その下の「洗礼」、北壁中段「変容」、南西壁上段の「ラザロの復活」、その正面の北西壁「エルサレム入城」、南西壁中段の「磔刑」その正面の北西壁に「冥府降下」が配される。前述した通り、キリストの埋葬以降の復活の場面は主に至聖所

に描かれるため、ここでは見られない。

南西壁下段と西壁下段にある寄進者とその家族の図像は、寄進者ウロシュ一世の石棺と墓所の目の前に描かれている（図３）。南壁ピラスター東側には祝福を与える玉座のキリストが描かれ、続く南西壁に聖母、寄進者の祖父である聖シメオン・ネマニャ、父の初代戴冠王ステファン（修道士シオンの姿）と寄進者であるウロシュ一世、そして西壁に２人の王子が描かれる（図６）。キリストが東側に描かれることで、あたかも聖母に導かれた寄進者家族がキリストに対面しているような構図となっている。その上段には「磔刑」が描かれ、復活を予告する場面を墓所の真上に設けている。

寄進者の墓の正面（北西角）で、上段に「変容」が描かれるところに大主教ヨアニキイェの墓がある。トディチの説では、もともと墓の前にはヨアニキイェ自身の肖像画が描かれていた[19]。しかし、1276年にドラグティン王子（王位1276-82）の謀反の際にウロシュ一世と共に更迭されたため、ナオス西部下段の寄進者の一連の図像は描き直され、その際にヨアニキイェの肖像画は別の図像（聖戦士）になった。

ニコリチの説によると、ドラグティン王は1280年頃に母イェレナの助言を得て、寄進者の群像を描き直した[20]。ドラグティン王は正当な後継者であることを主張するために自分を加えた新しい図像を描かせたということである。これまでセルビアの寄進者群像には後継者は描かれてこなかったが、息子が父王を更迭するというアクシデントによって新たな図像的発展が生まれた。

(3)　ナルテックス

東壁上部の破風状壁は剥落しているため、装飾の特定は困難であるが、旧約の物語が描かれていたことが推測された[21]。その下には「全地公会議」の７場面（第１回から第７回）と「セルビア教会会議」、そして「最後の晩餐」が３列３段に描かれる（図７）。「全地公会議」とは、キリスト教における聖職者の会議のことで、皇帝または教皇によって召集され、教義を決める最高権威の会議であるため、「セルビア教会会議」は、それに倣い実施されたことにより関連した図像として位置付けられている[22]。「全地公会議」の図像は、「聖霊降臨」の図像を借用して図像化された[23]。

その真下にナオスに通じる扉があり、ルネットには両手で祝福するキリストが描かれ、真上の「最後の晩餐」を祝福している。その左（扉北側）に玉座のキリスト、右（扉南側）に聖母子と寄進者ウロシュ一世とドラグティン王子が描かれる。

南壁にはキリストの祖先の家系を表す「エッサイの樹」が描かれる。旧約の義人でダビデの父であるエッサイを根としてキリストへ繋がる旧約の王と預言者を連ねた図像である[24]。上部は破損しているが、ミラノヴィチによると、中段に現存する「エッサイの樹」の部分から、その上の南屋根の内壁（アーチ曲面）にも続き、頂上に聖母と王としてのキリストの姿があったと同時代の作例より推測された[25]。

その南壁下段東側には、イェレナ王妃とミルティン王子が描かれる。これは、東壁下段から続く、寄進者の家族の図像の一部で、東壁の扉の南側の聖母子、寄進者ウロシュ一世とその家族という一連の寄進者群像と考えられる。ここでは、聖母が仲介者として寄進者家族をキリストに紹介し、キリストが寄進者家族を祝福するという架空の場面である（図７）。これもナオスの寄進

者像と同じくドラグティン王時代に描き直されたものといわれる。

南壁下段には、小礼拝堂に続く扉があり、その上のルネットに聖シメオン・ネマニャの半身像が描かれるが、現在は壁が設けられているため、聖シメオン・ネマニャの小礼拝堂へはつながらず、手前の聖ニコラオスの小礼拝堂入口となっている。ちょうど「エッサイの樹」の図像の下にネマニャのルネットがあることで、聖なる家族の祖先としてのエッサイにセルビアの創始者ネマニャを重ねていると解釈される[26]。それゆえ、ネマニャの左に寄進者家族が描かれることは、横に繋がる家系図として「エッサイの樹」を模倣した構図と捉えることができる[27]。

西壁上段の破風状壁も破損して識別が難しいが、オクネフによると「イサクの犠牲」が南側にあるという[28]。その下にはヨセフ伝の17場面が４段に配される[29]。物語は上から下へ、左から右へ進む。１段目に「ヤコブによって兄弟たちのところに送られるヨセフ」「シケムで兄弟を見つけるヨセフ」「兄弟に穴へ落とされるヨセフ」「血まみれの衣を見せられるヤコブ」、２段目に「商人とエジプトへ行くヨセフ」「ラケルの墓にいるヨセフ」「ポティファルに売られヨセフ」「ポティファルの妻の前のヨセフ」、３段目に「監獄にいるヨセフ」「監獄から出るヨセフ」「ファラオに宰相に命じられるヨセフ」「兄弟に穀物を配るヨセフ」「ヤコブにヨセフの生存を知らせる兄弟」、４段目に「エジプトへの到着するヤコブ」「ヤコブを歓迎するヨセフ」「ヨセフの息子たちを祝福するヤコブ」「ヤコブの死」である。

ヨセフ伝が広い面で描かれたことについて、セルビアの創始者ステファン・ネマニャ（聖シメオン・ネマニャ）とセルビア正教を設立したネマニャの息子でもある大主教サヴァ一世（聖サヴァ）を、ヤコブとヨセフに見立てたとセルビア中世文学では解釈される[30]。

その下段の外ナルテックスに続く扉の右（北西角）には十字架を握った聖コンスタンティヌスと聖ヘレナ（図８）が配される。コンスタンティヌスはビザンティン帝国の皇帝でヘレナは皇帝の母である。キリスト教を公認した皇帝として十字架を持って、入口を守る図像としてナルテックスによく見られる。対面する東壁の第一回全地公会議の場面の中央には玉座に座ったコンスタンティヌスとヘレナの図像が配される。

北壁上部も破損しているが、中段に確認できる「最後の審判」の部分より頂上までの広い面に大きく「最後の審判」の図像が描かれていたと考えられる[31]。その左下（北西）には、寄進者ウロシュ一世の母である「アナ・ダンドロの死」の場面（図８）が宮廷の人々を伴って表され、そのフレスコ画の目の前には実際に石棺が置かれ、その下に埋葬されている。この「アナ・ダンドロの死」の場面には、人一倍大きく描かれたウロシュ一世が表情をゆがめて悲しみの感情を表している。寝台に横たわるアナ・ダンドロの頭部の先にはキリストと聖母が現れ、顔の横には天使が彼女の魂を受け取りに来ている。若干構図は異なるが、「聖母の眠り」（図６）を彷彿とさせる場面となっている。また、「アナ・ダンドロの死」の右側（西壁）はちょうど聖コンスタンティヌスと聖ヘレナ像に当たる。母の死を嘆く息子と母の親密な関係性は、隣にあるビザンティン皇帝とその母の像と重なる。そしてコンスタンティヌス像の真上（西壁上段）には「ヤコブの死」（図８）の場面もあり、「アナ・ダンドロの死」と全く関連していないとはいえないことが指摘される[32]。

(4)　聖シメオン・ネマニャ小礼拝堂

セルビアのローカル聖人であり、中世セルビア王国ネマニチ朝の創始者、そして寄進者の祖父であるステファン・ネマニャ（約1113-1200年、在位1168-96年）は列聖され、聖シメオン・ネマニャとなった。彼に捧げられた小礼拝堂がナオス南西の角にある。

西壁上部アーチ部分には半身像のキリスト、その下に２人の天使が配され、その真下はコンクとなっている。そこに半身像の聖母子像、その下に「メリスモス」として聖皿の上に横たわる幼子キリスト、その両脇に天使が一人ずつ表される。南壁上部にはほとんど剥落しているが、おそらく「アトス山へ出発するシメオン・ネマニャ」と「アトス山に到着するシメオン・ネマニャ」と思しき場面が描かれたことが指摘される[33]。その正面の北壁上段には「ネマニャの遺体の移送」（図９）、その真下には寄進者のように表された聖シメオン・ネマニャの立像、そして西壁上段には「シメオン・ネマニャの死」の場面が描かれる。

(5)　外ナルテックス

前述したように外ナルテックスと鐘楼はウロシュ一世の曾孫にあたるドゥシャン王（のちの皇帝）によって建立された。東壁南側に幼い息子ウロシュと妻イェレナ王妃と共にドゥシャン王が表される。大主教ヨアニキイェ二世の肖像画が、西壁つまり鐘楼の東壁に一部に残される。また、東壁北側には主聖堂の寄進者ウロシュ一世王と彼の妻イェレナ王妃、ネマニチ朝の創始者である聖シメオン・ネマニャも再度敬意をもって描かれた。寄進者とその関係者の図像がここでも大きく表される。

３　装飾プログラムの考察

ソポチャニ修道院の聖三位一体聖堂には、建立当初より石棺とその下に墓が２か所あったことが確認され[34]、またプログラムにおいても埋葬者であるウロシュ一世王と、彼の母であるアナ・ダンドロを悼む図像が見られるため、明らかに墓所聖堂といえる。

至聖所は復活、ナオスは救済を表したプログラムである一方、ナルテックスと聖シメオン・ネマニャ小礼拝堂は旧約の場面とセルビアの歴史物語を関連付けたプログラムとなっている。

特徴的な図像としては、①寄進者家族の図像は大きく、複数人複数回描かれ、②セルビアで行われた宗教会議「セルビア教会会議」はビザンティン帝国の７回の「全地公会議」の図像に倣って、③寄進者の母の図像「アナ・ダンドロの死」は「聖母の眠り」を模して創作され、④中世セルビアの創始者であり、寄進者の祖父である聖シメオン・ネマニャのサイクルが配され、⑤地元の聖職者数名が描かれた点などがあげられる。また、ナルテックスに描かれる「公会議」「エッサイの樹」「ヨセフ伝」に関してもセルビアの独自の図像との関係性が伺える。そこにはネマニチ朝の支配者による何らかの強い主張がみられる。

「セルビア教会会議」が「全地公会議」の７回の場面と共に描かれたことに関し、ミラノヴィチは、ビザンティンの象徴的な遺産をセルビアが引き継ぐことで、「セルビア教会会議」の正当性を示した自己意識の表現であると指摘した[35]。しかし同時に詳細に描くこと、例えば、長司祭として修道士姿のシメオン・ネマニャを皇帝の右に位置する場所に描くことや、地元の主教を剃

髪で表したことで、セルビアの歴史を意識できるように努めたと解釈した。一方、ヴォイヴォディチは、「実際の公会議をほのめかすのではなく、正教会の闘いに捧げられた政府的なイデオロギー」として理解されるべきであると主張した[36]。

また、旧約の物語（「エッサイの樹」や「ヨセフ伝」）とセルビアの独自の図像との関係について、セルビアの研究者は、隠喩的な表現として、聖シメオン・ネマニャを「新しいイスラエル」、そして王朝の人々を「選民」として称えていると解釈した[37]。それは、ウロシュ一世時代に修道士ドメンティアン（推定1210-64年）が著した『聖シメオンと聖サヴァ』という聖人伝で、以下のように記されたためである。

「主は私たちのこの敬虔な父を見通しました。彼の恩恵が彼にあり、彼から敬虔な者が生まれ、彼の種は新しいイスラエルとして表れ、最終的に彼らは多くの恩恵によって啓発されるでしょう。[38]」

ここでドメンティアンは、聖書の比喩的表現である「根」、「花」、「苗木」「芽」「果実」に触発され、セルビアの王朝を「聖なる根」として強調した。聖シメオン・ネマニャは「美しい花の良い根」で、聖サヴァは「良い根から出でた新芽」であり、聖シメオン・ネマニャの子孫は「慈悲の蔓」と呼び、詩的な人物として「新しいイスラエル」に喩えたということである。それは、聖シメオン・ネマニャと彼の子孫を、選ばれた聖書の人物、イスラエルの指導者、そしてキリストに繋がる義人や先祖として象徴的に表現した[39]。イスラエルとは、ヤコブのことであり、前述したようにヤコブと聖シメオン・ネマニャを喩えたヨセフ伝の図像からも指摘できるように、ネマニャを「新しいイスラエル」として解釈した。この中世文学の解釈に対し、ジュリチは、図像の観点から、聖シメオン・ネマニャは、ヤコブではなく、主教のモデルであったヨセフの方にあると指摘する[40]。文学の絵画化に対する議論はここでは行わないが、いずれにせよ、旧約の義人の物語が、聖シメオンや聖サヴァのサイクルの絵画化に大きく影響したことは否めない。

「エッサイの樹」の真下に、寄進者家族や聖シメオン・ネマニャの図像が描かれたことに関して、前述した「聖なる根」との繋がりも関連して考えられる。それゆえ、セルビアで「エッサイの樹」の図像は、その後多くの聖堂で描かれるようになった[41]。そして、1320年以降、セルビアの家系図「ネマニャの樹」が複数の聖堂内に描かれるようになる。

4　結語にかえて

このようなソポチャニ修道院のセルビア独自の図像表現は旧約の物語との繋がりを強く表した図像であるという解釈がセルビアの美術史家の一致した見解である。しかし、それにしては表現が直接的すぎるのではないだろうか。聖人に見立てて寄進者を表現する方法は西欧でも行われた手法であるのに対し、王朝の一員である人々（寄進者とその祖先や子孫）の図像や物語を聖堂内に描くことの必要性とその感覚には何かキリスト教を超えた思考があるように見受けられる。セルビアの民俗学者チャイカノヴィチは、セルビア正教を立ち上げた大主教サヴァ一世（聖サヴァ）を『聖サヴァ伝』から推察して、性格と生まれもった気質がキリスト教以前の時代に属していると指摘する[42]。キリスト教以前の時代とは、スラヴ民族の土着信仰であるスラヴ神話との繋がりを指している。それはもちろん聖サヴァ一世の父であるステファン・ネマニャ（聖シメオ

ン・ネマニャ）や兄の初代戴冠王ステファン（聖シオン）、その息子で聖サヴァの甥であるソポチャニの寄進者ウロシュ一世（聖シメオン）も全く否定できない。それゆえ、今後の装飾プログラム研究においては、より支配者の実像に迫り、聖堂における図像選択の視点を考察していきたい。

また、ソポチャニ修道院の修復は、近年も盛んに行われており、2014年に黒色化したニンブスがかつて金箔で覆われており、その下から銀化合物が見つかったと報告された。それらの成分配合から、金箔はフィレンツェのフロリン貨、銀はヴェネツィアのグロッソ貨と同じであることがわかった[43]。ソポチャニ修道院にはまだ中世の謎を紐解く様々な発見が未知数にあることをここに記しておきたい。

本稿は、令和元年度公益財団法人鹿島美術財団「美術に関する調査研究」の研究助成対象の研究課題「中世セルビア王国の肖像画研究－寄進者とその家族」による研究成果の一部である。

註

1　Калић, J., Прокопијева Арса, *Зборник радова Византолошког института* 27–28, 1989, 9–17.

2　Ђурић, В., *Сопоћани*, Београд, 1963, 9–10.

3　Кандић, О., Истраживање архитектуре и конзерваторски радови у манастиру Сопоћани, *Саопстења* XVI, 1984, 14.

4　Cf. Кандић, 1984, 9–10.

5　Панић, М., Мандић, С., Живковић, Б., Заштита Сопоћана, *Саопстења* I, 1956, 27.

6　Тодић, Б., Апостол Андреја и српски архиепископи на фрескама Сопоћана, in: *Трећа југословенска конференција византолога*, Крушевац, 2000, 369–378; Поповић, Д., *Српски владарски гроб у средњем веку*, Београд, 1992, 61–78. 近年の二人の研究者の議論に注目したい。カンディチの説では、ソポチャニ修道院の聖堂は1265年頃、ウロシュ一世の両親の墓所聖堂として建立され、ストゥデニツァ修道院に倣い、自分と自分の家族を埋葬する場所としてグラダツ修道院建立した。Кандић, О., *Градац: Историја и архитектура манастира*, Београд, 2005, 195–206. それに対し、トディチの説では、ウロシュ一世の息子ドラグティンが謀反を起こしたために、建設が中断され、その代わりに墓所聖堂として妻イェレナ王妃がグラダツ修道院を建立しなければならなくなったが、ソポチャニ修道院の埋葬予定者は、母アナ・ダンドロ、ウロシュ一世王、友人の大主教ヨアニキイェであったと結論付けた。Тодић, Б., Сопоћани и Градац: узајамност фунерарних програма две цркве, *Зограф* 31, 2006–2007, 59.

7　ドラグティン王子が14–15歳で描かれたために、1251年頃生まれたと推定すると、1264–5に描かれたとペトコヴィチとオクネフは推測した。Petković, V., La mort de la reine Anne à Sopoćani, *L'art byzantin chez les Slaves* 1/2, Paris, 1930, 217–221; Н. Л. Окуневъ, Состав росписи храма в Сопочанах, *Byzantinoslavica* 1, 1929, 130.

8　アナ・ダンドロの死亡年代が1256年または1258年だとすると、プルコヴィチとラドイチチの説が下記論文に掲載される。Cf. Ђурић, 1963, 23–24.

9　大主教サヴァ二世は、ウロシュ一世の母違いの兄にあたる。大主教に就任したのは、1263年という記録からマンディチはフレスコ画の制作年代を1263年以降とした。下記論文に掲載される。Cf. Ђурић, 1963, 25–27.

10　ジュリチはドゥシャンが国王として描かれていたことから、外ナルテックスと鐘楼の寄進は、皇

帝になる以前の1346年以前とした。Cf. Ђурић, *Сопоћани*, 36; Кандић, О., Милошевић, Д., *Манастир Сопоћани*, Београд, 1986, 71.

11　Cf. Панић, 1956, 26-27.

12　図４は、聖三位一体聖堂の垂直断面図と水平断面図である。垂直断面図には36,0と書かれており、アプシスから鐘楼までの長さがおおよそ36,0メートルであることが示される。また人物の大きさより円蓋までの高さがおおよそ16メートルである。

13　Cf. Ђурић, 1963, 38.

14　内ナルテックスの東壁に「最後の晩餐」「七つの全地公会議」が描かれたことは、「聖霊降臨」を暗に示していることが伝えられる。Cf. Живковић, 1984, 38-39.

15　D･メダコヴィチ、V･ジューリッチ、D･ボグダノヴィチ『ヒランダル修道院』田中一生、鐸木道剛訳、恒文社、1995年、p.212。

16　Cf. Ђурић, 1963, 86.

17　Cf. Ђурић, 1963, 84.

18　Тасић, Д., *Средњовековни кутурно-историјски споменици*, Нови Пазар и околина, Београд, 1969, 135.

19　Cf. Тодић, 2006-2007, 60-69. ミルティン王の治世下（王位1282-1321）で、ウロシュ一世とヨアニキイェの遺体は移送され、ソポチャニ修道院に埋葬された。

20　Николић, Р., О једном значајном податку за датовање Сопоћана у књижевном делу архиепископа Данила II, *Свеске ДИУС* 17, 1986, 71-74.

21　内ナルテックス西壁に描かれるアブラハムの図像とヨセフ伝より対面する東壁に旧約の図像が描かれていたと推測した。Милановић, В., *Програм зидног сликарства у припратама српских цркава у XIII веку*, Београд, 2018, 73.

22　Cf. Живковић, 1984, 24-25.

23　上田恒夫、寺田栄次郎、中澤敦夫、木戸雅子訳『東方正教会の絵画指南書　ディオニシオスのエルミニア』金沢美術工芸大学美術工芸研究所、1999年、pp.313-316。

24　「エッサイの樹」については以下を参照：Male, E., *L'Art Religieux du XIIIe siècle en France*, Paris, 1898.（田中仁彦　他訳『ゴシックの図像学（上）』国書刊行会、1998年）。Male, E., *L'Art Religieux du XIIe siècle en France*, Paris, 1922.（田中仁彦　他訳『ロマネスクの図像学（上）』国書刊行会、1996年）。Grabar, A., *La peinture religieuse en Bularie*, Paris, 1928, 278-279; Male, E., *L'Art Religieux du XIIe au XVIIIe siècle*, Paris, 1945.（柳宗玄　他訳『ヨーロッパのキリスト教美術（上）』岩波文庫、1995年）。Watson, A., *The Early Iconography of the Tree of Jesse*, London 1934; Давидов, А., Представе Лозе Јесејеве у српској уметности XVIII века, *Зборник* 22, 1986, 147-171; Milanovic, V., The Tree of Jesse in the Byzantine Mural Painting of 13th and 14th, *Зограф* 20, 1989, 48-60; Ђурић, В., Лоза српских владара у Студеници, *Зборник у част Војислава Ђурића*, Београд, 1992, 67-85; Марјановић-Душанић, С., Мотив лозе Јесејеве у доба Урош I, *Зборник Филозофског Факултета* XVIII, 1994, 119-126; Милановић, В., Старозаветне теме и Лоза Јесејева, In *Mural painting of Dečani. Material and Studies*, Belgrade 1995, 361-374.

25　Cf. Милановић, 2018, 86.

26　Cf. Милановић, 2018, 87.

27　Војводић, Д., *Зидно сликарство цркве Светог Ахилија у Ариљу*, Београд, 2005, 111.

28　Окуневъ, Н., Л., Состав росписи храма в Сопочанах, *Byzantinoslavica* 1, 1929, 130.

29　Todić, B., Note on the Beauteous Joseph in Late Byzantine Painting, *DCAE* 18, 1995, 89-96.

30　Cf. Ђурић, 1963, 44-45; Ђурић, В., *Византијске фреске у Југославији*, Београд, 1974, 196-197;

Ljubinković, R., Sur le symbolisme de l'Histoire de Joseph du narthex de Sopoćani, ed. Djurić, V., J., *L'art byzantin du XIIIe siècle, Symposium de Sopoćani*, 1965, Beograd 1967, 211.

31 Cf. Милановић, 2018, 89.

32 Cf. Милановић, 2018, 81.

33 Cf. Ђурић, 1963, 83, 136.

34 Тодић, Б., Белешка о првом игуману Сопоћана, *Црквене студије* 3, 2006, 423-429.

35 Cf. Милановић, 2018, 78.

36 Cf. Војводић, 2006, 115.

37 ヴォイヴォディチは、「エッサイの樹」を模して創造した「ネマニャの樹」というセルビアの王朝の家系図について語る上で、「エッサイの樹」がセルビアで頻繁に描かれるようになったことは、「聖別」、「永続の支配」、「選民思想」といった3点の意向を表す図像としてセルビアの王朝のイデオロギーであると解釈した。Војводић, Д., Лоза немањића, *Лексикон српског средњег века*, Београд, 1999, 371-373.

38 Доментијан, *Живот Светога Саве и Живот Светога Симеона*,（Превео Мирковић, Л.,）Београд, 1938, 239.

39 Cf. Доментијан, 1938, 238.

40 Cf. Ђурић, 1963, 44-45; Ђурић, 1974, 196-197.

41 アリリェ聖アヒリオス聖堂（1296年）、プリズレンのボゴロディツァ・リェヴィシュカ聖堂（1306-07年）、ストゥデニツァ修道院鐘楼（1325年頃）、デチャニ修道院主聖堂（1350年）、モラチャ修道院（1577-78年）などに描かれた。

42 Чајкановић, В., *Мит и религија у Срба*, Београд, 1973, 149-154.

43 Јеликић, А., А., Станојевић, Д., О злату на сопоћанцким фрескама, *Саопштења* XLIX, 2017, 57-74.

【図像キャプション一覧】

図1　ソポチャニ修道院聖三位一体聖堂外観（2019年）

図2　ソポチャニ修道院外観三位一体聖堂外観（1926年）

図3　ナオス南西壁下段

図4　三位一体聖堂平面プラン

図5　至聖所アプシス北壁下段

図6　ナオス西壁

図7　内ナルテックス南東壁

図8　内ナルテックス北西壁

図9　聖シメオン・ネマニャ小礼拝堂北壁

【図版出典】

図2、4　Кандић, О., Милошевић, Д., *Манастир Сопоћани*, Београд, 1986.

図5　修復家ドラガン・ストヤノヴィッチ氏撮影

その他については筆者撮影

図１　ソポチャニ修道院聖三位一体聖堂外観（2019年）

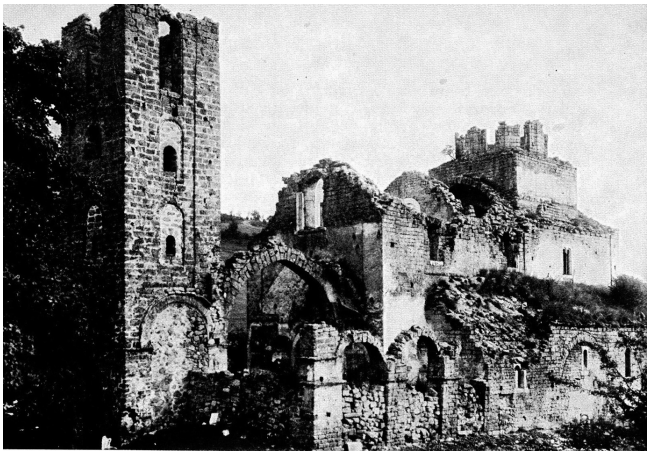

図２　ソポチャニ修道院外観三位一体聖堂外観（1926年）

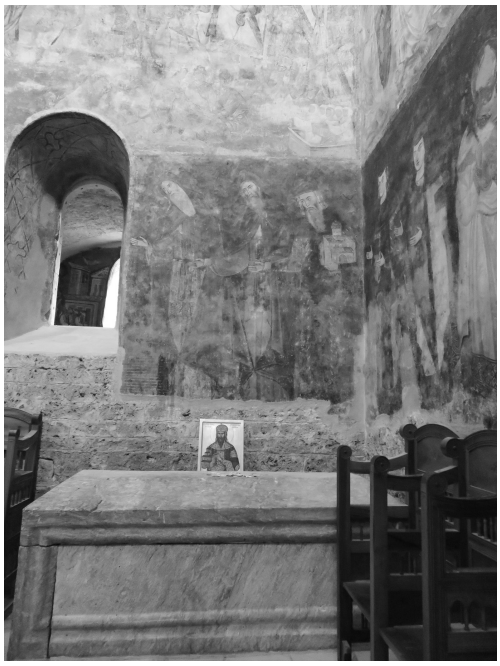

図３　ナオス南西壁下段

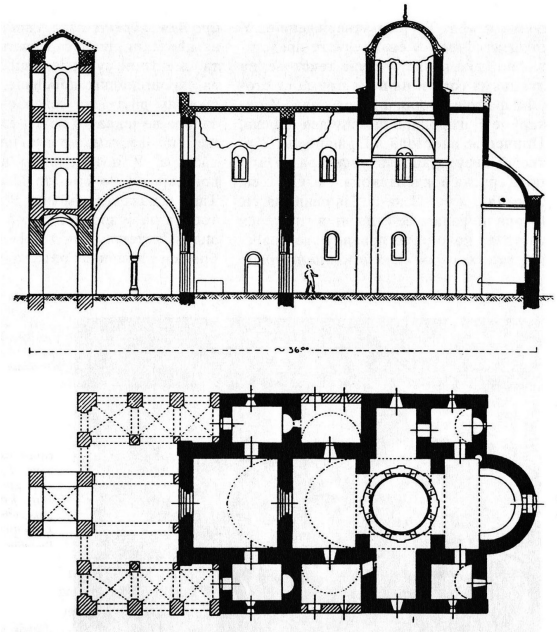

図４　三位一体聖堂平面プラン

図５　至聖所アプシス北壁下段

図６　ナオス西壁

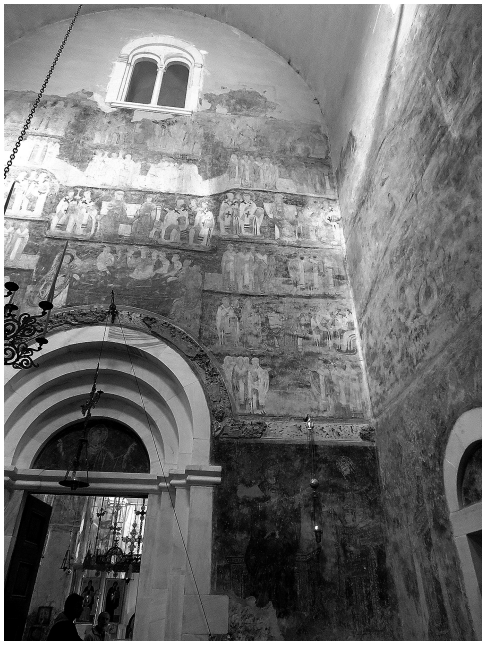

図７　内ナルテックス南東壁

図８　内ナルテックス北西壁

図９　聖シメオン・ネマニャ小礼拝堂北壁